

吉原克則臨床教授送別の辞

本多 満

東邦大学医療センター大森病院, 総合診療・救急医学講座

平成も残り1か月となるこの平成31年3月31日をもって、吉原克則先生が東邦大学での勤務を終えて退任となることになりました。先生は、昭和53年3月東邦大学医学部を卒業後に、東邦大学医学部附属大森病院にて研修医として研修を受けて、昭和55年6月に東邦大学第一外科講座に入局されました。一般外科で研修後に昭和62年4月には胸部心臓血管外科に移籍されて、平成4年には胸部心臓血管外科講師、平成15年には総合診療・急病科学講座に移籍され講師、平成17年に助教授、18年救命救急センター（以後救命センター）部長、平成24年7月には副院長となり、同年10月に東邦大学医療センター大森病院救急・災害統括部部長、臨床教授となり現在に至っております。このように一般外科、胸部心臓血管外科、救急科、災害医療と多くの診療科を渡り歩き、本当の専門が何か他人から見るとわかりにくくなっておりませんが、先生ご本人の弁としては「災害医学がライフワーク」だそうです。特に平成23年3月11日の東日本大震災の際は、深夜、救命センター当直医にのみ「震災地に行ってくる！」と告げて、東京DMAT隊として当院看護師のDMAT隊員2名を引き連れて、気仙沼へ勇躍に出動してしまいました。私は震災当日に、吉原先生と大震災の対応のため交代で救命センターに泊まり込む予定であり、11日には自宅に帰って数日分の泊まり込む用意をして翌日救命センターに行くと「東北に行ったが、その後の吉原先生の行方が分からない」と大騒ぎになっていました。当時の院長から「部長の吉原先生がいらないから、副部長の君は東北には勝手に行かないように！」と釘を刺された記憶があります。数日して気仙沼にいることがわかり無事に帰京されましたが、しばらくはその気仙沼の武勇伝を皆に聞かせて御満悦の様子でした。そして、その翌年より救急・災害統括部部長に就任して、取り憑かれたように災害訓練と地域での災害時対策の連携会議に明け暮れる毎日現在に至っております。このように何かあると、その猪突猛進な行動力を発揮するのが吉原先生の大きな魅力です。

私が初めて吉原先生の存在を認識したのは、私が東邦大学に入学した1年生の年度末頃に柔道場でいつものように稽古をしていた際に、壁がなく隣接する剣道場より今までに聞いたことのない大音声の気合が聞こえてきた時でした。稽古後に、柔道部の先輩にあのとんでもない気合の声の主を聞いたところ、「6年生で卒業して国家試験が終わって暇で練習に来た吉原さんだよ」とのことで、練習中は防具の面をつけていたので顔はわかりませんでしたが、深く印象付けられました。震災時に皆が「吉原先生どうして東北に行ったのか？」と言っていました。突然の気仙沼行きは剣道で培った気合一閃、大震災の気仙沼に切り込んだのだと私にはすぐに理解できました。

話は前後しますが、私が脳神経外科に入局して、主に頭部外傷、脳血管障害の診療を行うようになって、救命センターで過ごす時間が多くなり、心臓血管外科の泊まり番である吉原先生と接することが多くなり、心臓のことをいろいろ教えていただき大変お世話になりました。現在の本学の救急医療の枠組みを作られた上嶋権兵衛先生が退任となるのとほぼ同時に、吉原先生と循環器内科の五十嵐正樹先生と私が副部長として救命センターに移籍となり、そこからは運命共同体となりました。その後、平成18年に救命センター部長となってからは、私をはじめ周囲の人と臨床のことだけでなく、卒前卒後教育に関する事、今後の東邦大学の救急医療のことなど多くのことでいろいろディスカッションを行いました。特に学生教育に関しては熱心であり、ポリクリの学生一人一人に十分な時間を取り熱心に接し、最初は症例の解説から入り最後は熱く教育論を学生に対して述べる姿を多くの者が目にしております。昨年の救急医学の最終講義の際には、学祖額田晉先生の「自然生命人間」の自筆の額のスライドを使用して救急医学、災害医学と共に東邦愛を語り、聴講している学生のみならず救命センター医局員にも大きな感銘を与えました。このように東邦大学で多くの記憶に残ることをなされ、存在感のある吉原先生が大学を去ることは大変寂しく、救命センター

一同悲しい気持ちで一杯ですが、4月からも災害好きと教育好きのあまりふらりと現れそうな気がします。今後とも

救命センター、大森病院だけでなく東邦大学を含めた我々を見守っていただけることを願っております。